

次年度の技術対策

(1) 土づくりによる気象変動に強い稲づくり

近年は天候の変動が激しく、このような気象条件下でも高品質・良食味米を安定的に生産するためには、透排水性の改良、耕深（根域）の確保、地力の維持・増強などの総合的な土づくりが重要となります。耕深を確保する、過度の代かきを避ける、有機質資材やケイ酸質肥料の施用等、登熟後半まで稲体の活力を維持できるような土づくりを目指しましょう。

また、使用する肥料の種類が多様化し、肥培管理もそれぞれ違ってきています。ほ場条件や肥料の特性を理解し、適切な肥培管理に努めましょう。

(2) 基本技術励行による収量・品質の安定化

29年は、気象の影響により、全体の傾向として初期分けつの発生が少ない年となりましたが、植込本数が足りない場合や深植等の管理状況が茎数減を助長している場合も見られました。

今一度、健苗育成（活着良好な苗）、適切な田植え作業（時期、植込本数の確認、植付深の調製等）、生育ステージや気象条件に適切した水管理（浅水、深水、適期中干し、カドミウム吸収抑制等）等の基本的な技術を見直し、安定した稲作りを実践しましょう。

(3) 適切な乾燥調製

29年の9～10月は降雨が多く、その合間での作業となったことから、収穫時の籾水分が高かったと考えられます。このため、機械乾燥に時間がかかり、作業の都合上半ば強制的に乾かした場合も多かったと考えられ、品位等検査では胴割れによる落等が多くなりました。

ほとんどが機械による乾燥であり、その精度は向上していますが、乾燥機的能力や容量に合わせた刈取計画を立てることが重要となります。

(4) 斑点米カメムシ類対策

一部地域では、カメムシ類の加害による斑点米での落等が多い地域もありました。大規模化や複数品種の導入等により、ほ場毎の生育状況等に合わせた適切な管理ができていない場合も見受けられるので、今一度、経営全体の中での作業計画の見直し等により、適期作業・適期防除を行い斑点米被害を回避しましょう。

近年主要種となっているアカスジカスミカメは、イネ科やカヤツリグサ科雑草で繁殖するため、耕種防除として本田内及び畦畔にカメムシ類が増殖しない環境を作ることが重要です。